聖泉看護学研究　Seisen J. Nurs. Stud., Vol. 4. pp.39-46, 2015

資　　料

基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学び
―レポートの分析―

The Learning for the Students in the Basic Nursing Practicum Ⅰ
― Analysis of the Report ―

今井　恵[1)]*，松永　早苗[1)]，千田　美紀子[1)]，井上　美代江[1)]，
Megumi Imai，Sanae Matsunaga，Mikiko Senda，Miyoe Inoue，
辻　俊子[1)]，井下　照代[1)]，上野　範子[1)]，森下　妙子[1)]
Toshiko Tuji，Teruyo Inoshita，Noriko Ueno，Taeko Morishita

キーワード　学生，基礎看護学実習Ⅰ，学び
Key Words　students，basic nursing　practicum　Ⅰ，learning

抄　録

背景　基礎看護学実習Ⅰにおける学びは，その後の学生の成長に大きく影響を及ぼし，看護師になろうとする学生の動機付けを高める．そのため，初めての臨地実習における学生の学びを評価することは重要である．

目的　基礎看護学実習Ⅰを評価するために学生のレポートを分析した．

方法　学生が基礎看護学実習Ⅰ終了後に提出したレポート「実習を通して学んだ看護」の記載された内容をコード化し，サブカテゴリーに分類後，カテゴリー化した．

結果・考察　基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護として，【療養環境を理解】，【コミュニケーションの重要性】，【患者のニーズと個別性に合う看護】，【患者・家族の精神的ケア】，【安全・安楽・自立・効率性を考えた看護】，【他職種との連携】，【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】，【専門職業人としての意識】の８つのカテゴリーが抽出できた．学生の学んだ看護は，基礎看護学実習Ⅰの目標と合致していた．さらに，学生は，短い実習期間のなかで実習目標以外の学びも得ていた．しかし，【療養環境を理解】についての記載が少なく，意図的にかかわる必要性が示唆された．

結論　学生が学んだ看護の内容は，基礎看護学実習Ⅰの目標と合致しており，さらに目標以外の学びも得ていた．しかし療養環境の理解については，指導方法を検討する必要がある．

Ⅰ．緒　言

看護学における臨地実習において，学生は看護職者が行う実践の中に身をおき，看護職者の立場でケアを行う．臨地実習は，学内で学んだ知識・技術・態度の統合を図りつつ，看護技術を習得するため，看護実践能力を培うには極めて重要である（文部科学省, 2002）．臨地実習での早期体験は，看護専門科目への知的関心を高めていくこと（村松，2006）や，学生が何を思い感じて，何を体験するかはその後の学生の成長に大きく影響を及ぼすこと（岩脇ら, 2008）が報告されている．また，山口ら（2007）は，医療者としての自覚や経験・知識が少ない学生だからこそ，対象者をひとりの人間としてとらえ，真剣に患者と向き合い，そしてその体験が看護師になろうとする学生の動機付けを高めていると述べている．したがって，看護を志す学生にとって，初めての臨地実習である基礎看護学実習Ⅰの役割は重要である．

本学の学生は，１年前期末に行われる基礎看護学実習Ⅰで初めて看護職者や患者と接する．学生が実習で学んだ看護がどのような内容であったかを知るために，基礎看護学領域では，実習を通して考えた私の看護というテーマのレポートを課題としている．そこで本研究では，学生がレポートに記載した内容を分析し，それによって，基礎看護学実習Ⅰにおける学生の学びを評価し，実習指導の在り方について検討する．

[1)] 聖泉大学　看護学部　看護学科　School of Nursing，Seisen University
* E-mail　imai-m@seisen.ac.jp

Ⅱ．A 看護大学における基礎看護学実習Ⅰの目的

地域で生活し病院に通院，あるいは入院しながら治療を受けている人々に出会い，コミュニケーションを図り，人々の生活や健康上のニードを知り看護の対象である人間を理解する．さらに看護の役割と機能について学ぶ．（表１）

Ⅲ．方　法

１．研究デザイン

本研究は，学生の自由記述式レポート（以下，レポートとする）を用いた質的記述的研究とした．

２．調査対象者

A 看護大学の１年生のうち，2013年９月に基礎看護学実習Ⅰを履修した学生で，研究の同意が得られた者とした．

３．研究期間

平成25年９月～11月

４．研究方法

学生が，基礎看護学実習Ⅰ終了後に提出した，基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護に関するレポートの記載内容を分析対象とした．

５．分析方法

学生が基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護を記述したレポートを繰り返し読み込み，記述内容の意味が損なわれないように，レポートの全文を単文化した．単文化した一文をコード化し，類似するものをサブカテゴリーに分類後，カテゴリー化した．分析は，共同研究者間で合意を得るまで検討した．

６．倫理的配慮

研究協力の依頼については，対象者に調査前に研究目的と研究方法を口頭と文書で説明した．その際，研究参加は対象者の自由意思であること，不参加の場合も不利益を生じないこと，同意後であってもいつでも中止できること，また成績には無関係であること，レポートの匿名性について説明した．そして，研究終了後に裁断処理すること，本研究以外に使用しないことを説明した．なお，同意書については，配布後に研究者は退出し，教室の後部に回収ボックスを終日設置し，自由投函できるよう配慮した．本研究は，当該科目の評価終了後に実施した．レポートは，個人が特定できないように匿名化を図るため，氏名の記載を消去したものをコピーした．得られたデータを保存した USB は，鍵のかかる場所で厳重に保管し，安全管理の徹底を図った．

本研究は，A 大学倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：８）．

Ⅳ．結　果

本研究の協力を依頼し同意が得られたのは，A 看護大学１年生94名のうち，62名（回収率65.9％）であった．学生62名のレポートから339のコードを抽出した．それらを33のサブカテゴリーと，８のカテゴリーに分類した（表１）．以下に，基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護をカテゴリー別に示す．文章中の【　】はカテゴリー，『　』はサブカテゴリー，「　」はコードを示す．

１．【療養環境を理解】

学生は，「一人一人患者さんのためを思って行動することでより良い環境になっていく」，「ただ単に明るい，静かだけではなく，患者にあった環境が大切なのだ」と述べており，『患者が快適な入院生活を送れる療養環境の工夫』が必要であることを学んでいた．

２．【コミュニケーションの重要性】

学生は，「コミュニケーションをとることによって，看護師と患者の信頼関係が築かれていく」，「病気の症状だけでなく患者の趣味の話や世間話をすることによって患者との信頼関係を築くことができる」と述べており，『患者と看護師との信頼関係の構築』が重要だと学んでいた．そして，「信頼関係を築くには，目線を合わせることや笑顔で対応すること，しっかり話を聞くこと」，「患者によって声の大きさを変えたり，言葉使い，話すスピード，表情，目線など工夫していた」と述べており，『患者とのコミュニケーション手法の工夫』をすることが必要だと学んでいた．また，「患者

表１　基礎看護学実習Ⅰの実習目標

実習目標	学習内容	学び方
1.病院見学を通して、患者の治療・生活の場である環境について理解できる。	・実習病院・看護部の理念、方針 ・病院・病棟の構造、設備、機能 ・患者の入院生活での安全対策の実際 ・入院生活での患者の１日の過ごし方 ・医療における倫理的配慮	・病院・病棟オリエンテーションを受ける ・看護活動の見学を通して患者の生活の様子を知る ・既習したことを活用する「生活援助論」「倫理綱領」 ・自己学習を活用する ナイチンゲール：看護覚え書 ヘンダーソン：看護の基本となるもの
2.さまざまな健康レベルにある人々とのコミュニケーションを通して、看護の対象となる人間を理解できる。	・学生としての基本的挨拶 ・患者を尊重した言葉による会話 ・健康障害を持って入院している患者の思いや考え ・看護師と患者の会話場面から患者の反応を観察 ・実際の会話を通してコミュニケーションによる対象理解の意義	・既習したことを活用する 「観察／コミュニケーション／対人関係」 ・看護師と患者の会話場面を観察する ・患者と話す機会を得て患者や家族と会話し、その考えや思いを理解する ・自己のコミュニケーションの取り方について振返る
3. 対象の健康上のニーズについて理解し、日常生活の援助を見学する。	・健康障害による基本的ニーズの変化 ・健康障害が日常生活に及ぼす影響 ・看護師の患者(家族) への接し方 ・看護技術の安全/安楽/個別性/自立/効率性 ・看護行為に対する説明と同意 ・全人的ケア	・病棟オリエンテーションを受ける ・看護師の患者への接し方と患者の反応 ・看護活動の見学に参加し援助の意義を考える ・既習した学習内容の確認 「基礎看護論Ⅰ」「生活援助論」
4. さまざまな医療職の役割について理解できる。	・看護職以外の医療職の役割 ・他種職と看護師との連携の実際	・病院・病棟のオリエンテーション ・既習内容を活用する ・様々な医療職と看護師との連携の実際を見学する
5.さまざまな看護の場における看護の機能と役割を理解できる。	・実習病院・病棟での看護活動の目的 ・看護師の援助の目的 直接ケア/教育指導的役割/相談支持的役割/調整的役割 ・個人情報の守秘義務	・病院・病棟のオリエンテーション ・既習内容を活用する「基礎看護論Ⅰ」 ・看護活動の見学・参加を通して看護職の役割と他職種との相互連携に関する気づきや意見をｶﾝﾌｧﾚﾝｽの場で発表し、メンバーと意見交換する ・「看護学臨地実習要項」、既習した「看護師の倫理綱領」を活用する
6. 看護学生としてふさわしい態度で実習できる。	・時間を守る ・看護学生としてふさわしい身だしなみ ・医療施設関係者、入院患者への挨拶 ・学生として報告・相談・連絡 ・学生として主体的学習の取り組み ・学生としての健康管理	・指定された時間の５分前に集合する ・実習ｵﾘｴﾝﾃｰｼｮﾝで服装・身だしなみついての説明を受ける ・対象に応じた基本的挨拶の実際を看護師・教員からの指導を受け見学する ・患者・家族・医療スタッフとの約束事を守り、その場に適した報告・相談・連絡をする ・実習に対する自己学習課題を明確にして計画的に取り組み、その成果をサブノートに整理して記載する

表２　基礎看護学実習Ｉを通して学んだ看護

カテゴリー	サブカテゴリー
療養環境を理解	患者が快適な入院生活を送れる療養環境の工夫（19）
コミュニケーションの重要性	患者と看護師の信頼関係の構築（22） 患者とのコミュニケーション手法の工夫（46） コミュニケーションで患者の情報収集（13） 医療用語を使用せずわかりやすい言葉で説明（8）
患者のニーズと個別性に合う看護	患者に寄り添う看護（12） 患者を第一に考えて１人１人に応じた言動を提供（14） 患者の情報を正確に捉え根拠に基づいたアセスメント（15） 患者の個別性とニーズにあった看護（9）
患者・家族の精神的ケア	患者の不安を除去（2） 患者へ安心感と癒しを提供（6） 精神面のケア（18） 患者家族の精神的なケア（7） 患者の近くで見守り安心を与える役割（4） 看護師が担う母性の役割（2）
安全・安楽・自立・効率性を考えた看護	患者の安全・安楽を考えた医療の提供（22） 患者情報の漏洩を予防（2） 感染対策の遵守（3） 患者の自立を促し回復する力をサポート（9） 仕事の効率・優先順位を考えた行動（9）
他職種との連携	病院に働くすべての人と患者とのパイプ役（2） チームで情報を共有し問題を解決（22） 患者を他職種で連携して支援（8）
患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性	忙しくても患者の前では笑顔（6） 患者に対する気遣いと気配り（12） 視野を広く感受性を豊かにする努力（7） 良きパートナーとしての看護者（9） 人の命に関わる責任ある仕事（3）
専門職業人としての意識	英語を学ぶ大切さ（2） 看護師自身が自分の体調を管理（8） 看護師に必要な忍耐力・精神力・判断力（6） 十分な知識と高い技術のための自己研鑽（9） 患者の人生に大きく関わる仕事（3）

さんの不安や悩みを同じように感じ，患者さんとコミュニケーションをとりながら情報収集する」，「自然な会話の中で情報を入手している」と述べており，『コミュニケーションで患者の情報収集』することを学んでいた．そして「看護師は医療用語を使わずに患者や家族の方にわかりやすいように詳しく説明されていた」，「どんなときでもわかりやすい言葉を使うように心がけて，話す内容を理解してもらえるようにする」と述べており，『医療用語を使用せずわかりやすい言葉で説明』することが必要であると学んでいた．

3．【患者のニーズと個別性に合う看護】

学生は，「患者に寄り添い，支えとなれる看護師になりたい」，「患者さんの気持ちに添うことがまず一番に大切だ」と述べており，『患者に寄り添う看護』の必要性を学んでいた．また，「患者さんのことを一番に考え，患者の立場や気持ちにたつ」，「その人のことを思いやり，その人にとって何をするべきかを考え行動に移す」と述べており，『患者を第一に考えて一人一人に応じた言動を提供』する必要性を学んでいた．そのためには，「看護師は先のことを予測し，次につながる看護を行っている」，「看護師は観察する力がとても大切」と述べており，『患者の情報を正確に捉え根拠に基づいたアセスメント』が必要であると学んでいた．そして，それらを基に，「個別性を考え，臨機応変に患者にあった援助ができなくてはならない」，「対象のニーズにあった看護を行うことが必要」だと述べており，『患者の個別性とニーズにあった看護』を学んでいた．

4．【患者・家族の精神的ケア】

学生は，「患者が悩んだり，不安に感じていることを少しでも楽になるように努め，取り除けるようにする」，「不安を取り除こうと努めていた」と述べており，『患者の不安を除去』することの必要性を学んでいた．そして，「会話をすることで患者さんは安心感が得られている」，「患者に癒しを与えられることは，快適な入院生活につながる」と述べており，『患者の安心感と癒しを提供』することを学んでいた．また，「精神面において気づきやケアもしなければならない」ことや，「患者さんの立場に立ち恐怖に対する声掛けはとても大切である」と述べており，『精神面のケア』の必要性や，「家族の精神面のケアも大切」，「患者だけでなく家族のケアも積極的に行っていく」と，『患者家族の精神的なケア』の重要性も学んでいた．そして，「看護師はずっと近くで見守ってくれる人で，近くにいてくれると安心」，「処置をするときだけでなく患者の一番身近で安心を与えるような役割」があると述べており，看護師には『患者の近くで見守り安心を与える役割』があると学んでいた．また，「看護師が母親代わりになって愛情を注ぐ役割もある」と述べていることから，『看護師が担う母親の役割』があると感じていた．

5．【安全・安楽・自立・効率性を考えた看護】

学生は，「病院はミスが許されない場であるため，医療安全は常に厳重にしなければならない」，「患者が安楽に入院生活を過ごせるようにサポートしている」と述べており，『患者の安全・安楽を考えた医療の提供』の必要性を学んでいた．そして，「パソコンを離れるときは必ずログオフを行い，患者の情報を流出しないようにしていた」と述べており，『患者情報の漏洩を予防』することの必要性を学んでいた．また，「病室に入る前後，さらに患者が変わった際に必ず消毒を行う」と述べており，『感染対策の遵守』についての必要性も学んでいた．そして，「患者の回復していく力や可能性を引き出していくことが大切」，「患者の持っている最大限の力を活かしつつ，看護師がサポートすることが大切である」と感じ，『患者の自立を促し回復する力をサポート』することの大切さを学んでいた．そのためには，「看護師は常に次のことを考えて行動している」，「無駄な動きがなくそのために仕事を効率よくできている」と述べており，『仕事の効率・優先順位を考えた行動』が必要であると学んでいた．

6．【他職種との連携】

学生は，「医師との連携役にもなっており患者と病院に所属する全ての人のパイプ役になっている」と述べており，『病院に働くすべての人と患者とのパイプ役』であることを学んでいた．また，「状況を常に把握しスタッフ全員が同じ看護，医療を提供しなくてはいけない」，「看護師同士の情報共有も重要となってくる」と感じており，『チームで情報を共有し問題を解決』することの必要性を学んでいた．そして「看護師以外との連携をし

ながら多職種とのチーム医療をしている」,「患者をサポートするのは看護師だけの役目ではなく,多くの職種が携わって看護している」と述べており,『患者を他職種で連携して支援』することの必要性も学んでいた.

7.【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】

学生は,「笑顔でいることは大切」,「どんなに忙しくても,必ず笑顔で接しておられた」と述べており,『忙しくても患者の前では笑顔』でいることの必要性を学んでいた.また,「患者の気持ちを考えながら細やかな気配りも必要である」,「個々の患者さんに対する気遣いをしている」ことより,『患者に対する気遣いと気配り』が必要であることを学んでいた.そして,「広い視野から患者をとらえられるように自分自身が多くのことに関心を持ち,テレビや新聞から情報を積極的に得ていく」,「患者の抱える不安や悩みを感じ取れるように感受性を豊かにする」と述べており,『視野を広く感受性を豊かにする努力』が必要であることを学んでいた.また,「患者のすべてを理解したうえで,患者の求める看護をしていかなければならない」,「看護師は患者の苦しみに耳を傾け,社会復帰に向けての良きパートナーでなければならない」と学生は感じており,『良きパートナーとしての看護者』であると学んでいた.そして,「人の命に関わる仕事なので,みんな責任感をもっていないといけない」,「看護師として責任を持って仕事に取り組む」と述べていることより,看護は『人の命に関わる責任ある仕事』であることを学んでいた.

8.【専門職業人としての意識】

学生は,「患者さんの身を守るだけでなく,看護する側の身もしっかり守ることが大切」,「自分の体調も管理できないといけない」と述べており,『看護師自身が自分の体調を管理』することを学んでいた.そして,「忍耐力と判断力を同時に発揮しているうえに,しっかりとした精神力も兼ね備えている」,「どのようなことでも受け入れられるような広い心を持つべきである」と述べており,『看護師に必要な忍耐力・精神力・判断力』の必要性を学んでいた.また,「患者が日本語を話せるとは限らないので英語も話せるようになった方がよい」と述べており,『英語を学ぶ大切さ』について学んでいた.そして,「十分な知識や技術を身につけないといけない」,「根拠ある看護が実施できるように知識と技術を身につけなければならない」と述べており,『十分な知識と高い技術のための自己研鑽』の必要性を学んでいた.そして,「患者のその後も考え,一人の人間の人生に大きく関わっている」,「その人がその人らしく生きるために支える」と述べており,看護は『患者の人生に大きく関わる仕事』である重要性を学んでいた.

V.考　察

患者が生活する療養環境の場について,実際に照度計や騒音計で病棟内・病室・ベッド周囲の環境を測定した場面から【療養環境を理解】する必要があることを学んでいた.そして,環境を適切に整えることで,患者の生命力の消耗を最小限にするナイチンゲール,F.(2009)の環境の捉え方を理解し,日常生活において患者にあったよりよい環境を提供することを学べていた.しかし実習目標1の学習内容「病院・病棟の構造,設備,機能」については,記載が少なかった.これは,実習施設の構造や設備が整っていたため,学生の印象として残りにくかったのではないかと考える.そのため教員は,前期に既習している内容と実習との関連を意識し,学生カンファレンスやまとめで意図的にかかわる必要がある.

山口ら(2007)は,学生が実習前から年配の人と話す機会が少なく不安を感じ,実際に患者の反応がつかめず会話が途切れることがあり,コミュニケーションの難しさを述べている.今回の実習で学生は,緊張で思うように患者とのコミュニケーションが図れない場面があった.しかし学生は,看護師と患者の日常会話におけるコミュニケーションを観察するといった経験により,患者と看護師の信頼関係の構築や,人間関係について,既習の学習内容であるコミュニケーションに関する看護の意義を振り返りながら,【コミュニケーションの重要性】を学んでいた.コミュニケーションや観察によって患者情報を得ること,その情報をアセスメントして【患者のニーズと個別性に合う看護】が行われていることを看護師の実践する看護から学んでいた.さらに学生は,医療安全対策の見学や,看護師が点滴・内服薬の確認を何度

も行っており，患者が安全・安楽に入院生活を過ごせるよう看護師がサポートしている場面から【安全・安楽・自立・効率性を考えた看護】や，患者や家族と会話する時間を大切にしている場面から【患者と家族の精神面のケア】の重要性も学んでいた．また，患者のリハビリや栄養指導の場面の見学やカンファレンスを通して，患者をサポートするための【他職種との連携】の重要性を学んでいた．これらの内容は，基礎看護学実習Ⅰの目標１）～５）に合致していた．

さらに学生は，基礎看護学実習Ⅰの目標にはあがっていない【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】,【専門職業人としての意識】についても学んでいることが分かった．ヘンダーソン，V.（2010）は，看護とは病気ではなくそれに出会っている人間をみることをつねに優先させると述べているように，患者に関心を寄せ，患者の些細な表情や言動の変化から，【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】が看護師に必要であることを学んでいた．山口ら（2007）は，医療者としての自覚や経験・知識が少ない学生だからこそ対象者をひとりの人間として捉え，真剣に向き合い，そしてその体験が看護師になろうとする学生の動機づけを高めていくと述べている．本研究においても，学生は３日間という短い実習期間のなかで，看護師に必要な『十分な知識と高い技術のための自己研鑽』が大切であると述べているように，看護師自身が自ら学び成長していくことの必要性を理解し【専門職業人としての意識】を持つことが出来たと考える．

Ⅵ．結　語

１．学生が，基礎看護学実習Ⅰを通して学んだ看護として，【療養環境を理解】,【コミュニケーションの重要性】,【患者のニーズと個別性に合う看護】,【患者・家族の精神的ケア】,【安全・安楽・自立・効率性を考えた看護】,【他職種との連携】,【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】,【専門職業人としての意識】の８つのカテゴリーが抽出できた．

２．学生が，学んだ看護のうち，【療養環境を理解】,【コミュニケーションの重要性】,【患者のニーズと個別性に合う看護】,【患者・家族の精神的ケア】,【安全・安楽・自立・効率性を考えた看護】,【他職種との連携】は基礎看護学実習Ⅰの目標１～５に合致していると考えられ，さらに学生は，実習目標以外の【患者の気持ちを感じ取る豊かな感受性】,【専門職業人としての意識】についても学んでいた．

３．今回分析したレポートの内容からは，病院・病棟の構造，設備，機能についての記載が少なかった．教員は，前期に既習している内容と実習との関連を意識し，意図的にかかわる必要性が示唆された．

謝　辞

本研究にご協力いただきました研究対象者の皆様に深謝いたします．

文　献

フローレンス・ナイチンゲール（2009）：看護覚え書―看護であること・看護でないこと―，湯槇ます訳，現代社，東京都．

伊藤朗子，中岡亜希子，岡崎寿美子，他（2009）：早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討，千里金蘭大学紀要，No. 6，63-72.

岩脇陽子，滝下幸栄，今西美津恵，他（2008）：早期体験学習としての基礎看護学実習の学習効果と実習満足度に関連する要因，京都府立医科大学看護学科紀要，vol.17，31-39.

金川真理，福森絢子，清水佑子，他（2014）：基礎看護学実習Ⅰにおける看護学生の学習意への教育効果基礎看護学実習Ⅰ前後の変化から，宇部フロンティア大学看護学ジャーナル，７（１），21-28.

文部科学省（2002）：看護学教育の在り方に関する検討会　報告　大学における看護実践能力の育成の充実に向けて　平成14年３月26日．

村松淳子（2006）：学生の学習力を育む 信頼関係の構築をめざした早期体験実習，日本看護学教育学会誌，vol.16，58.

岡崎美智子，小林幸恵（2002）：島根医科大学医学部看護学科における基礎看護学領域の実習，Quality Nursing，８（５），75-84.

鷹居樹八子，弓削なぎさ，中村恵美，他（2012）：基礎看護学実習における看護・援助技術に関する認識の変化からみた実習目標の達成状況，産業医科大学雑誌，34（２），207-216.

ヴァージニア・ヘンダーソン（2010）：看護の基本となるもの, 湯槇ます訳, 日本看護協会出版会, 東京都.
山口智子，上野範子，緒方巧，他（2007）：初回基礎看護学実習のレポートの分析（その１）―早期体験学習の学習効果に焦点をあてて―，藍野学院紀要，No.21，84-92.
山本智恵子，土井英子，杉本幸枝，他（2012）：基礎看護学実習Ｉの病院実習での学びと課題，新見公立大学紀要，33，119-124.